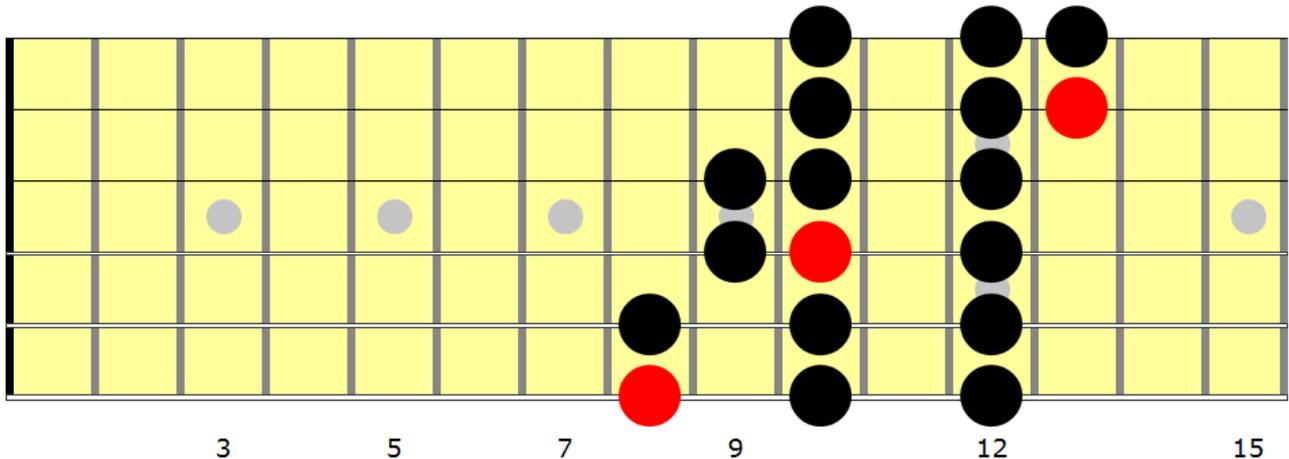


スケールを覚えるコツを掴み完璧にマスターする講座 スリーノート・パー・ストリング編 vol.05

前回の vol.04 では、以下のアイオニアンスケール、6弦トニックポジションを弾いてみましたね。



形としてはかなりシンプルな構造になっているので、覚えるだけならそこまで時間は掛からないでしょう。

ただ、こういったポジション(形)だけを覚えて、すぐにアドリブ練習を始めたりすると、単なる上下運動の様な状態になりやすいわけで、そこから脱却するためには『弾く音を選ぶ』という観点が必要になってきます。

で、まず重要になってくるのが『スケール構成音のインターバル』ですね。

この辺り、「スケールを覚えたり、その後使ったり」と言う行為には段階があって、おおよそ、

- 1、スケールポジションを何かしら覚える
- 2、そのスケールのインターバル(構造)を覚える
- 3、そのスケールから導き出されるダイアトニックコードを把握する(※スケール構成音から1、3、5、7度を抜き出すと、対応するコードが形成される、ということがわかる)
- 4、弾こうとしている曲(またはコード進行)のkeyと、そのkeyの基準スケール&ダイアトニックコード群と、いま自分が弾こうとしているものの関係性がわかる

5、コード進行に合わせて、自分がどんなスケールを使うことができ、どんな音使いが可能かがわかる

6、キチンと音楽として成り立っている、フレーズ(メロディー)を作って演奏できる(※これは必ずしも、(主に西洋的な)音楽理論に完全一致している必要はない)

と、こんな感じでしょうか。

このプロセスの背景には、

「インターバルのそもそもの仕組み」

だったり、

「keyとスケールやダイアトニックコードの知識」

を学んでいる事も含んでいるのですが、全てをわかっているなければ先に進めない(進んではいけない)、と言う話ではありません。

さらに、全ての人の学習プロセスが、必ずしもこの順番に沿っている必要もないのですが、(特に情報収集の段階から)完全に 独学の場合は、

- ・演奏面(テクニック強化、暗記から実用までのプロセス等)
- ・知識面(音楽構造の理解、把握、創作への活用等)

の両者とも、身に付けるべき順番がめちゃくちゃになっていることが多いかと思います。

(※僕自身のことを振り返ってみるとそうでした。なのでこうして体系的にまとめた教材を作っているところがあります)

そして、これについては功罪の両面が出てくると思いますが、こういった知識的な面などを全てすっ飛ばしても、ある程度演奏として形になる(なってしまう)のが、

『耳(自分の音感)を頼りに、曲(コード進行)などに合う音を探りながらアドリブ(フレーズ作成)をする』

と言う行為です。

これはこれで、一種の「実践」としてはとても大事なものなので、やるかやらないかで言ったら、そのとき自分がどんなレベルにいるとしてもやった方が良いものです。(※視

点を変えれば、ごく自然な行為でもありますし)

ただ、この行為の中で、次の問題として見えてくるのは、『“今の自分の感覚”を超えるものは、プレイとして中々出てこない』ということですよ。

この問題を解決するには、僕の他の媒体でも繰り返しお話ししているのですが、

- ・とにかくコピー(新規インプット)を増やし、自分の知っている演奏のバリエーションを増やす
- ・音楽の構造(≒音楽理論等)を理解し、主に知識面から今までやったことのないパターンを試す

の二つになるでしょう。

結局のところ、どちらにせよ、やっていることは

『“今の自分にはないもの”を取りれていく』

ということなので、実例(楽曲やフレーズ等)からインプットするか、音楽のそもそもの構造(理論)から編み出していくかの違いでしかありません。

で、スケールトレーニングは、理論的な側面から見ても見えていかないと、フィジカル的な面からだけでは、練習のバリエーションとしてはすぐに頭打ちになってしまいがちな所があります。(※やっていることが同じようなものばかりになりがち)

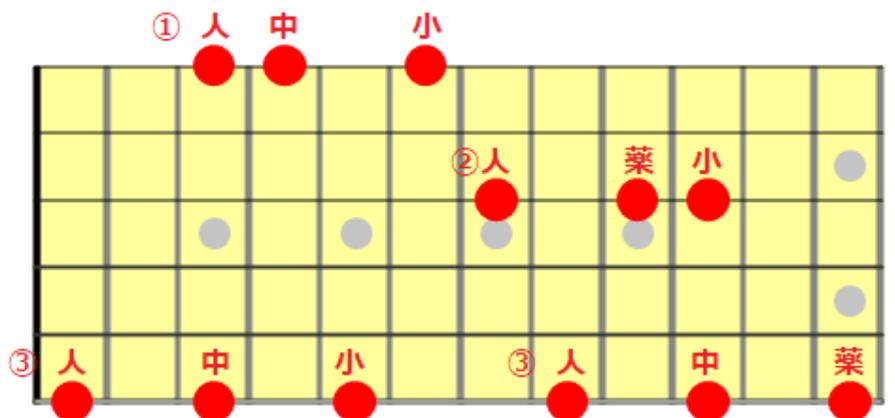
それを避けるために『音楽構造の理解』として、特に「インターバルの把握」が重要になってくるのです。

ということで、かなり前置きが長くなってしまいましたが、今回から、視覚的な形だけではなくスケールの中身(構造)を詳しく見ていきます。

■指使いとインターバルの配置を一致させてしまう

ではまずは、3nps スケールを弾くときに出てくる、主な指使い3種がありましたね。

※図、3nps スケール、基本指使い

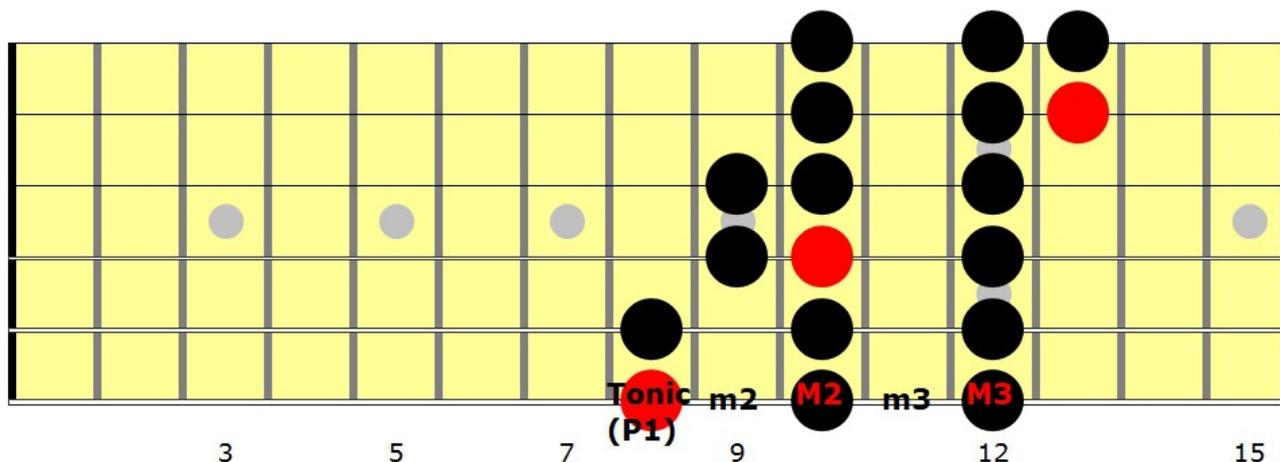


※15フレット付近からそれ以上の

ハイポジションで弾く場合等

この内、③の指使いが、前回弾いたアイオニアンスケールの最初に出てきますね。

この時、人差し指にトニックが来るので、残りの中指と小指で弾く音は、トニックに対して、M2nd(長2度)と M3rd(長3度)になります。



そしてついでに、この弾いている3音の間には、m2nd(短2度)と m3rd(短3度)もある、と。

この辺り、「インターバルのそもそも論」的な部分は別の教材で解説しますので、まずは『指使いと弾いている音のインターバルがどう一致するか?』を覚えてしまいましょう。

今回の例で言えば、

『このページの上部にある、基本指使い図の③を弾く場合、人差しでトニックを弾いたら、中指に M2nd、小指に M3rd が来る』

と丸暗記してしまいます。

これは、半音刻みでフレットが打たれている普通のギターならば、どの弦の、どのフレットからスタートしても、必ずこのインターバル配置になります。

そして、先に書いたように、これがわかると、M2nd と M3rd のそれぞれ半音下に、m2nd と m3rd があるのもわかりますね。(※1つ前の図参照)

よくある説明として、メジャースケール(アイオニアンスケール)のインターバルは、
tonic、M2nd、M3rd、P4th、P5th、M6th、M7th

で、それぞれの音の間隔が、

tonic(P1st)、(全音)、M2nd、(全音)、M3rd、(半音)、P4th、(全音)、P5th、
(全音)M6th、(全音)M7th、(半音)、(tonic、octave)

となっている、と言うものがあります。(※僕も他の教材で書いています)

これが俗に言う『全全半全全全半』と言うやつですが、これをこのまま最初の音(tonic)から順番に数えていく様な練習もアリですし、一度はやっておいてほしいものです。

ただ、それはまあ、少し調べれば山ほど出てくる情報ですので、この講座では、もう少し違うアプローチをとっていくというのが趣旨になりますね。

ということで、具体的な練習法よりも前置きが長い回になってしまいましたが、今回は以上になります。

今、学んでいることの大枠を言葉にすると、

『ここにこの音(その時基準に見る音)が来て、こういった指使いをする場合、ギター(指板)の楽器としての構造上、必ずこういったインターバル配置になる』

とこんな感じですね。

この視点があると、単に「指板と丸印だけのポジション図」を出されて、それを丸暗記するよりも、音楽的な理解も含めてスケールが頭と身体に入っていきます。

それでは、次回も引き続き、スケールポジションと、その構造を把握するための練習法を見ていきましょう。

ありがとうございました。

大沼